カール・ディームの 「Körpererziehung bei Goeth」の研究「Ⅱ」

加 藤 元 和
(昭和43年5月24日受付)

Das Studium über “Körpererziehung bei Goethe” von Carl Diem (II)

M. Kato *Osaka Hochschule für Körpererziehung*

In diesem Abschnitt des Studiums wird nur der Gedanken von der Körpererziehung und dem Sport behandelt. Sein Gedanken, als die Beziehung mit dem Körper und Geist, die Beziehung mit seiner Anschauung von der Natur und Körpererziehung usw.

In diesem Abschnitt wird das Studium in folgenden Hauptpunkte dargelegt.

- 1) Körpererziehung ist eine Ausbildung, die auf den Ganzmenschen zielen.
- 2) Sie ist eine Ausbildung des Ganzmenschen, die Harmonie der körperlichen und geistigen Seite oder der körperlichen und geistigen Spannung im Menschen zu wünschen.
- 3) Sie ist eine Ausbildung, um die Selbstvollkommenheit durch die natürliche Tat zu erwarten.

Ⅱ. ゲーテにおける体育思想

ゲーテは、他の多くの大才達よりずっと体育運動に親しんだ男であり¹⁾、「私には、運動が永遠に必要である²⁾」と体験的・自覚的に受け止めるほどであった。とはいえ、彼は体育を思想的側面から体系的に考究するようなことはなかつた。ディームがゲーテを評して、偉大にして最初の Sportlehrer という賛辞³⁾を贈つたとしても、ゲーテは、いわば体育に関しては一介のディレタントで終始したのである。

反面、当時の体育界のレベルからすれば、なを、ゲーテの思想の中で語られている体育観は卓見と考えられるものも少なくないばかりか、根源的意味からすれば、現代的体育思想への飛躍も読みとれるのである。そんなわけで、ゲーテの労作に現われた体育思想について追究することは意義多いことだろうし、更に、そうした事との関連で、ディームの思想を観るのもまた

重要であろう。

ここでは、まず、第一に精神及び身体との融合と体育との関連性について、ゲーテがどう考えているかについて観る。

第一章の所で、明らかにしたように、シュトラスブルク時代がゲーテにおける本格的体育実践の端緒だとするディームの見解は一応肯定されるとしても、ウィルヘルム・マイスターの口を通して、ゲーテ自身の語る所に拠れば、彼の自己完成への希求は少年時代から芽生えていたものなのである。「一言でいうと、現にいまあるがままの私自身を完成するということが、確信とまでいかないまでも私の少年時代からの…目的でもあつた。ところで私には、自分の家柄のために得られないでいる自分の自然のあの調和的な完成ということに、どうにもならない欲求を感じている。私は君と別れてから、体育運動 (Leibesübungen) を通して得る所が多かつた……。精神と身体とは……歩調を合せていかなければならない⁴⁾」という思想の中には、自己教育・自己完成に占める体育の位置が明示されているばかりか、体育を通しての精神と身体

大阪体育大学

昭和42年度文部省科学研究費「各個研究」にもと
づく研究

との融合の実現への願望が満ちあふれている。しかしながら、当時の教育界の実情は、ルソーの影響があつたとは言え、「幼少のうちから身体的にも、精神的にも鍛えてやるのが至当である⁹⁾」というような考え方とは、およそかけはなれていた。ゲーテの理想とした教育は「全人教育であつて、心身の両面にわたつてできる限り配慮を届かせる¹⁰⁾」ものであつた。ディームが、こうしたゲーテの思想の中で、「人間の多面的育成の理念」や「創造的な人間形成の理念」を読みとつた⁷⁾ということは正当な評価と言えよう。

ゲーテにあつては、精神と身体との融合・統一は一つの理念としてたかまつていた。イタリア紀行に際しても、彼はこうした面の観察を怠らなかつた。「イタリアでは、美しい身体と美しい精神が、同じ屋根の下、同じ部屋に仲良く和合して住んでいる⁸⁾」というような認識を持つに至り、逆に、ドイツの人々の心身の不調和を批判的にとらえているのである。

こうした心身調和思想はゲーテのものであると同時に、ディームその人のものでもあつた。ディームに拠れば、主人と下僕のような上下二つの部分として、精神と身体とを鍛練するという啓蒙思潮期の考え方にとどまつている限り、現代の人間形成もまた色あせたものとなる⁹⁾とする考え方に、そうしたことが端的に表明されている。

ゲーテは人間における全能のものとして、「mens sana in corpore sano¹⁰⁾」(健全なる精神は健全なる身体に)を挙げ、精神と身体との協働は人間における自然性だとする時、ディームの認識する通り、そこに、ルソーとの脈絡を読み取ることができる¹¹⁾。その上、ゲーテにあつては、精神的生産のみの肯定ではなく、行為的・身体的生産力の重要性も自覚的に受け止められている。「詩や劇を創作するだけが生産的であるのではない。行為の生産力もある。そして、多くの場合、この方がなお一段と重大である¹²⁾」と説き、こうした行為的生産力は精神だけに宿るのでなく、身体にも宿るとするのを聞く時¹³⁾、そこではまた逆に、こうした行為的

産力において、精神と身体との融合を直観する彼を見い出すことができるのである。また、「精神と身体にも、それぞれの権利を認める。そして、両者の統一はつねに、要求され、希求されるものだ¹⁴⁾」として、彼自身の認識の上では、終始二元論的立場を前提¹⁵⁾とするものの、それらの融合・統一を究極において求める姿は、本来的に、彼の「行的一元論¹⁶⁾」を明示する姿勢であつた。こうしたゲーテの認識上の二元論や実践上の「行的一元論」についての指摘がディームの研究の中でなされなかつたのは彼の重大な見落としといえよう。

ゲーテはその死に至るまで、自然において、精神と身体との調和を追い求めた。それ故、反自然的なもの、人為的なもの、強制的なもの、発展性のないものなどの影響によつて、「人間は、心身ともに支離滅裂にされてしまう。そして、心身のどちらも病気になり、挙句の果に、錯乱した努力を重ねながら滅んでいく¹⁷⁾」しかないのであつて、彼においては、自然の中にこそ人間的なものがあり、人間的なものの中にも自然のあることを直観することによつて、初めて、自然的行為としての、それ故、人間的行為としての体育実践への道も開けてきたのである。

ディームはこうしたゲーテの自然への親和がとりもなおさず彼の体育実践の根源的動機であるということについて、この研究では追究していないけれども、後年の彼の思想での体育における人間の内的自由の尊重や人間の自然性・自発性の重視という点をとつてみれば、また、こうしたゲーテ思想との脈絡を跡づけることができるのである。

ゲーテにおける精神と身体との融合・調和の希求は、彼の自然観に根ざしていた。それ故、次に、ゲーテにおける自然主義的傾向や自然への没入について観る。前述したように、こうしたことは、彼の体育実践の動因となつたものに外ならないものであるから。

まず、ファウストの口を通して、ゲーテの自然観をみる。「はてしのない大自然よ。お前はどこを捕えたらよいのか……天も地も幼子のよ

うにすぎりつく一切の生の泉よ¹⁹⁾。これが彼の自然であり、それは「おれの魂をつつんで生きて働くもの¹⁹⁾」なのである。彼にあつては、自然は永遠の生命である。すなわち、「自然のうちには永遠の生命、生成及び運動がある²⁰⁾」人間もまたすべて自然のうちにあり、自然はすべての人間のうちにある。それ故、彼にあつては、人間的自然のうちにも生命と運動を直観するのである。そして、彼は、そうした意味での運動の一種として、体育運動を想定するのである。

ディームに拠れば、ゲーテは人為的・平面的・形式的運動を否定し去り、自然における体育運動、あるいは自然的体育運動を推奨し、彼もまたそれを実践したとしている²¹⁾が、こうしたことどもまた後のディームの体育・スポーツの思想形成に多大の影響を与えたのである。

ゲーテにおける自然との親和は当時の教育界を風靡したルソーの教育小説の影響と考えられるものの、ゲーテ自身もまた自然の状態の重要性を認識していた。「人は自然の状態に身をおくよう努力しなければならない、という考えから発した当時の気違いじみた活動の一つに、野外の水泳ということがあつた²²⁾」水泳は「あるがままの自由の実現を求めた、その奔放な傾向²³⁾」の反映であり、詩的気分の十全の発揮であつた。しかしながら、ゲーテの生きた時代では、まだ「そうした自然の行為はどうも現代的風習にうまく調和しなかつたので、水泳をやるにしてもまた幾分控え目にした²⁴⁾」

ルソーにあつてと同様に、ゲーテにあつても自然の行為を抑圧するような教育や道徳に対して、反対の立場をとつていたのである。そこで、彼は「生れの良い、健康な子供達は、多くの能力を持つている。自然は、すべての人に一生必要なるものをすべて与えた。それを発展させることが私達の義務であるが、往々にして、自然によりよく発展することがある²⁵⁾」と述べ、自然性に根ざす自己教育を重視する。彼における健全な教育とは、自然との親和に根ざした教育であつた。エッカーマンとの対話に出てくる思想はそのことを端的に述べている。「こ

の国では、愛する青年達をすべて幼少から馴らしつけてしまおうと意図して、もろもろの自然性も、あらゆる創造性も、一切の野性をも追い出してしまう²⁶⁾」ゲーテはそうした反自然的教育や形式的教育によつて育成されている「近眼、蒼白で、胸のうすつぺらな、青春というものを知らない青年²⁷⁾」に言い知れぬ絶望を感じ取る。「青年達は一人前になるかならないうちに、精神的にも、身体的にも駄目になつてしまひ……、実際社会に出て、着実に活動するのに絶対的に必要な精力が彼らには、精神的にも、身体的にも欠けてしまうのである²⁸⁾」

こうした対話の中にも、自然の善性という思想、自然と精神及び身体との融合との関係が如実に語られている。自然における教育はゲーテにあつては一つの理念であつた。「パセドオーがすべての教授法に生氣と自然性を求めたことは、私にも気に入つた²⁹⁾」と、当時一介の自然主義者をもつて任じていたゲーテはパセドオー流の自然の教育に対しても肯定的態度を明らかにしていた。

ディームはこうしたゲーテの中で、上からの、強制的で不自然な教育に対する批判を読みとり、「この詩人は、内面から突き上げてくる行為の喜びを抑えこんでしまうような一切の事柄に反対した³⁰⁾」という認識を通して、彼の思想形成においても、こうした面を重視する傾向を生んだのである。

「私は自然の中にいるのが好きです。そんなわけで睡眠、食事、水浴、乗馬、散歩などが、私の生活の幸な内容なのです³¹⁾」と説くゲーテであつてみれば、彼の希求してやまなかつた自然への没入は体育運動への接近であり、逆に、体育運動への没入は、自然との親和の実現を意味していたのである。

最後に、いくつかの体育運動に関する考え方を個別的に観ることもまた重要であろう。

ゲーテは詩人クロプシュトック (Klopstock F.G.) の影響をうけて、「今までやつたことのないスケートをやろうと決心し、短期間に、練習と創意と忍耐とを続けて、陽気で、にぎやかなスケートを皆と楽しむに必要な程度³²⁾」の腕前

になった。ゲーテに拠れば、この体育運動の効用は生々とした青少年と接触できることや軽快な身のこなしを感得できることにありとし、更に、「他の身体的緊張は身体を疲れさせるだけなのに、この運動は身体にたえず新たな活力を与えてくれる³³⁾」という体験から、他の体育運動と比較して、スケートの素晴らしさを吐露している。

彼にあつては、自然における体育実践と創作活動とが見事に融合し、調和を保つていたということについては、既に、前章で述べておいたが、1773年発表された「ゲッツ」の創作にあつても、体育実践、特に、このスケートは有力な刺激剤となつた。この間の事情について、彼自身の口から聞いてみる。「けれどもほかならぬこのしばしば一人静かに試みた運動（スケート）、宙を浮動する、こののびやかな運動こそは、しばらく眠っていた私の内的欲求を少なからずまた刺激し、こうした運動のおかげで、私は以前から企画していた計画を一層すみやかに完成することができた³⁴⁾。」と言っているように、スケートを通しての身体的緊張と精神的緊張との調和及び自然との親和によつて、彼は文学的生産性をも高めていつたのである。こうした事実と関連して、「ゲーテが体育によつて得たものは、単なる体育的成就ではなく、その人間性の高揚、生命力の充実、精神力の強化などであつた³⁵⁾」というディームの認識は正当性を持つといえよう。

1825年、76才のゲーテとその弟子エッカーマンとは弓の効用に関して、可成り立ち入つて対話を交している。「弓術の美しさは、身体を調和的に発達させ、体力（Kräfte）を平等に使用させるところにあります。弓を引きしぼつて延ばしている左腕は緊張し、力強く微動だにしません。矢を引く右腕、この方も左腕に劣らず筋力が必要です。同時に、地上に向かつて真直に開いた両足と両股とは上半身をしっかりと支える土台となります。的をねらう眼、頸部一帯の筋肉、すべて非常に緊張し、活動的です。そして、矢がはっしと放たれ、ねらつた的にあたつた時の快感。私は身体の鍛練として

弓術と比肩しうるものを知りません³⁶⁾」というエッカーマンの見解に対して、ゲーテは賛意を表しながら「それは、わが国の体育学校（Turnanstalt）に採用したら良いだろう³⁷⁾」と意見を述べている。更に、この二人の師弟は、弓の材質、弓の製造法、バシユキレン（Baschkiren, トルコ民族の一種族）の弓などについて意見の交換をし、すっかり弓の話に熱中してしまつた。そして、こうした対話によつて内的欲求を刺激されたゲーテはしまいに1814年、バシユキレンの酋長から贈られたという弓を持ち出してきて、若いエッカーマンに実際に射させ、果ては、自分自身も弓射をたのしんだのである。こうした有意義な対話と楽しい実践の中で、若きエッカーマンは「生きた知識」へのあふれる憧憬と「事物の内面にまで突き進まずにいられない情熱」とを師としてのゲーテその人から受け継いでいつたのである³⁸⁾。こうした意味において、ディームも認めているように、ゲーテはまた偉大な教師でもあつた。ディームはゲーテの中に「教育者に必要な三位一体、すなわち、体力、精神的崇高、冷静の三位一体の具現³⁹⁾」を認めていることは肯定されて良からう。

ゲーテは、イタリアの研究旅行者ピエトロ・デラ・バレ（Pietro della Valle）の教育について、「西東詩集のより良き理解のための注解と論文」（West-Östlicher Divan, Besserem Verständniss）の中に書き止めている。これに拠れば、諸体育運動は体力と性格の力の陶冶に役立つとしている。すなわち、「徒歩及び馬上での武技の稽古、高邁なフェンシング術及び馬術は、彼の体力（Körperliche Kräfte）の日々の発達と、これと密接に結合している性格の力の発達に役立つ⁴⁰⁾」と。こうした考え方は、当時の身体運動がまだ個人的技術の習熟だけを重視する傾向にあつたのと比較すればなお優れた考え方といえよう。

同書では、また「カブスの書」（Buch des Kabus）の著者キエキャヴス（Kjekjawus）の少年時代の教育において、水泳が特に重視されていたことに触れている。『キエキャヴスの父は、身体を十分に鍛練させようとしてある立

派な教師に息子を託した。その教師は、彼に弓射、乗馬、騎射、槍投げ、ボロの技術など、すべての騎士的技能を仕込んで、父王の元に返した。これらのことが皆完全に成功したので父王は満足そうであつた。そこで、その教師を大いに称賛したが、更に、つけ加えてこう言つた。

「実は、私はまだ一つ思い起させたいことがある。君は私の息子に、他の道具を必要とすることばかりしか教えてくれなかつた。馬がいなければ乗馬はできない。弓がなければ弓射はできない。投槍を持つていなかつたら、彼の腕などなんになろう……。自分自身以外に何一つ要しない時に、誰も助けることのできない時に、一番必要な唯一のものを君は教えてやつてくれなかつた」。その教師は恥入つた。王子(キエキャウス)には水泳術が欠けていたのである⁴³⁾。当時、まだ水泳が一般的な体育運動として、ドイツにおいて普及していなかつた時点で発せられたこうしたゲーテの見解は、水泳を民族的運動(Volksübung)にまで押し上げる端緒を形成したとして、ディームは高く評価している⁴⁴⁾。ゲーテにあつては、自然と人間との間に変転してやまない水以外のなに物も介在しない水泳は自然への直接的没入を可能にするという意味で、偉大な教育力や体育力を発揮する運動と理解されていたので、重視されたのである。

既に、体育実践の章で述べたように、散策は、ゲーテの日課の一つであつた。こうした散策の途上で会つた若き大学生クルマッハー(Krummacher, F. W)との対話はツルネン(Turnen)の問題にまで及んだ。『当時 イエナの大学生だつた私は、ツルンプラッツ(Turnplatz)から体操服のまま、一人山の方へ向けて散歩していた。この山は、ゲーテの休息所と名づけられていた……。『そんなにお急ぎかい』親切にそう呼びかけられ、『ツルンプラッツからのお帰りかね』とたずねられた。そうですと答えると、彼(ゲーテ)はこう応じた。

「私はツルネンというものを重視している。それは若々しい身体を強壮新鮮にするだけでなく、心に、特に勇氣と力を与えて軟弱を防ぐ」と……。そして勉学のかたわら自然を喜びとす

ることは良いことだ⁴⁵⁾』この頃のゲーテは、既に、65才を上まわつていたので、自分自分ではあまり激しい運動をしなかつたが、散歩のかたわらツルンプラッツに現われては、生々とした青年達の練習を熱心に見守つた⁴⁶⁾。

ゲーテはツルネン問題に対しても一つの識見を持ち、当時、プロイセン州を中心に実施されていたツルネン禁止令(Turnsperre)に対して批判的態度をとつていた。そして、ツルネンの復興とツルネンの効用について、このように言っている。「私はツルネン学校が立ち直ることを希望する。なぜならば、ドイツの青年にはこれが心要だ。特に、学生に必要なだ。学生は精神的な学問上のことで随分忙しく、身体的均衡をすっかり喪失している。そして、それと共に必要な活動力もなくなつているのであるから⁴⁷⁾」。

このように、後期における彼の思想の中にも、精神と身体との融合・調和を求める意識が働いていたのである。その上、ツルネン運動のような民族的運動に対して、少なからず興味を抱き、これが全人的形成と密接に関係を保つ民族的教養となることを欲したのである。更に、「概して、時代が成長してくると、身体や精神の鍛練とか、趣味や人格の陶冶などに重きをおかなくなる⁴⁸⁾」と説いて、体育の軽視にともなつて、人間教育に欠陥が生じてくることに警告をはなつているのである。こうしたゲーテの思想には、主知的、形式的、平面的な歪められた啓蒙思潮に対する主感的、行動的、創造的な力の強調⁴⁹⁾が認められるのである。

結 語

以上、観てきたように、ゲーテにおける体育実践を支えた思想及びその体育観は断片的・直観的なものでありながらも、なおそこに首尾一貫した思想を読み取ることができる。すなわち彼にあつては、体育は、まず第一に自然との親和を通しての人間の教育であり、第二に、自然における精神と身体との調和への全人教育であり、第三に、自然的行為を主体とする自己完成のための教育であることが明らかとなつた。結局の処、ゲーテにあつては、こうした体育思想

とその実践とが極めて自然に調和していたといえよう。

最後に、この研究で明らかとなつたディームの思想を簡明に述べると、1) 心身を統一的にとらえる思想。2) 体育はゲーテ的な調和的・生産的人間形成の手段であるとする思想。3) 体育は人間的自然と内的自由の表現であるとする思想の3点に要約できるのであろう。

一注一

- 1) Carl Diem, Körpererziehung bei Goethe. p. 47
- 2) Goethe, Tagebücher, p. 87
- 3) Diem, Ebenda, p. 50 参照
- 4) Goethe's Werke, Bd. 4, p. 21, 24, 25
- 5) Ebenda, Bd. 17, p. 44
- 6) Goethe, Bd. 8. p. 96
- 7) Diem, Ebenda, p. 18 参照
- 8) Goethe, Gespräche, Bd. 22, p. 198
- 9) Diem, Ebenda, p. 13 参照
- 10) Goethe, Bd. 22, p. 477
- 11) Diem, Ebenda, p. 120~121 参照
- 12) Goethe, Gespräche mit Eckermann, Bd. 24 p. 673
- 13) Ebenda, p. 675 参照
- 14) 15) Goethe, Bd. 22, p. 805~806;
- 16) 由良哲次, ゲーテの世界観と教育思想 p. 45
- 17) Goethe, Bd. 21, Briefe p. 1036
- 18), 19) Goethe's Werke, Bd. 9, p. 37
- 20) ゲーテ全集 Bd. 25, p. 6 改造社版
- 21) Diem, Ebenda, p. 50, p. 136
- 22), 23), 24) Goethe, Bd. 10. p. 814
- 25) Goethe, Bd. 8 p. 169
- 26), 27), 28) Goethe, Bd. 24. p. 689~690

- 29) Goethe's Werke, Bd. 19, p. 306
- 30) Diem, Ebenda, p. 128
- 31) Goethe, Bd. 18. Briefe p. 270
- 32) Goethe's Werke, Bd. 19, p. 136
- 33) Ebenda, p. 137
- 34) Ebenda, p. 138~139
- 35) Carl Diem, Sport im Lichte des Geistes p. 8
- 36), 37) Goethe, Bd. 24. p. 584
- 38) Ebenda, Bd. 24. p. 584~593 参照
- 39) Diem, Körpererziehung bei Goethe, p. 130
- 40) Goethe's Werke, Bd. 21, p. 412
- 41) Ebenda, Bd. 21. p. 449~450
- 42) Diem, Ebenda. p. 251 参照
- 43) Goethe, Bd. 23. p. 10~11
- 44) Goethe, Bd. 23. p. 20~21 参照
- 45) Goethe, Bd. 24. p. 585
- 46) Ebenda, p. 585
- 47) 岸田貫一郎, ゲーテにおける直観, 理想 No. 334, 1961, 3, p. 71 参照

引用・参考文献

- 1) Carl Diem, Körpererziehung bei Goethe, 1948
- 2) Carl Diem, Sport im Lichte des Geistes
- 3) Goethe's Werke, Bd. 26, 1816~1822. Wien
- 4) Goethe, Bd. 24. Artemis
- 5) Goethe, Tagebücher
- 6) ゲーテ全集, 全32巻, 改造社, 昭和15年
- 7) ゲーテ全集, 全12巻, 人文社, 昭和38年
- 8) ゲーテとの対話録, 1~3巻, 白水社.
- 9) 前田博: ゲーテとシラーの教育思想.
- 10) 由良哲次: ゲーテの世界観と教育思想.
- 11) シュウヴァイツァ著, 小栗孝則訳, ゲーテ
- 12) 三井光弥: 父親としてのゲーテ